

# ほったにすけさいこう 特集 堀田仁助再考

— 評価されない裏事情を解き明かす —



相州浦賀で新造された朱塗唐風の「神風丸(しんぷうまる)」1460石積  
(蝦夷地開発記／鈴木周助 15・16頁より画像ソフトでイメージ加工)

令和5年(2023)11月

*y.arase*

《4部》

目次. 4部

[8. 堀田仁助の事蹟を追って —堀田仁助蝦夷地開発ルート—](#)

[《トップページへ》](#)

## 8. 堀田仁助の事蹟を追って ～仁助蝦夷地開発ルート～

芸州廿日市津和野藩船屋敷に生まれた堀田に助は「蝦夷地開国に付船道筋を明、其外向寄々之測天度、於蝦夷地北極出地測量相調可申上」ため蝦夷地御用を命じられた。

寛政11年(1799)幕府の東蝦夷地上地するとき、各地の緯度測量のため、御用船「神風丸」で現地に派遣された天文御用堀田仁助の門弟鈴木周助の手記より、蝦夷地開発ルートを推定。

寛政十一年(1799)11月15日江戸着後5年を経た1804年11月(文化元年)、源中なる人物が周助ヨリ**借写**したものが、堀田仁助の事蹟を明らかにした唯一のものである。

しかし、蝦夷地測量行に関する仁助の自筆になる文書は今だ発見されていない?。そのため、仁助がアッケシの帰途、陸路松前へ行き、奥羽津軽領三厩(みんなまや)より海路ではなく陸路江戸へ帰府し、松平信濃守に不埒と云わしめたその理由が謎のままである。

(蝦夷地開発記/北海道大学付属図書館北方資料データベースより加工引用)

### これから、堀田仁助の蝦夷地測量の記録を追う

寛政11年(1799)6月27日 江戸出立

6月27日 築地門跡後

寛政11年(1799)6月27日、未刻神風丸出帆に付、御用之御印を付けた大茶船(品川沖で廻船荷物の瀬取りに従事した大型船)2艘で「築地門跡後(西本願寺)」へ着く。種々の御用物積入れる。

稲荷橋

申刻(午後3-5時)南風強きに付「築地稲荷橋」へ船廻す。東西に流れている八丁堀と東で合流している亀島川の合流地点に『イナリ橋』がある。

6月28日 <sup>あかつきがた</sup> 暁方(夜明け前の暗い時分) <sup>しんぷうまる</sup> 順風に付乗出し、品川沖に停泊している神風丸へ向う。

6月28日 品川沖洲崎弁天、現在の利田(かがた)神社の東は海だった。沖に神風丸碇泊。浦賀にて出来(しゅったい)する新船なり。

6月28日乗船。

順風吹かず28、29、晦日と品川沖3日待機。



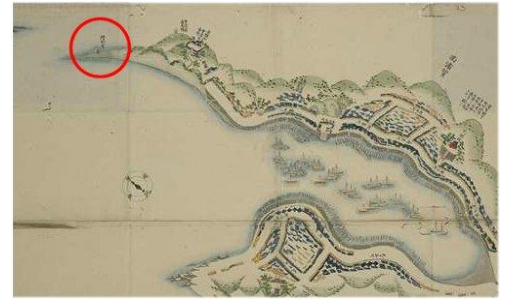
(蝦夷地開発記/鈴木周助 15・16 頁より加工)

## 2:

翌7月朔日、辰6分(朝9時過ぎ)品川沖出帆す、江戸城亥子(真北より西より)の方に見る。

7月2日 相碕浦賀湊入津

村役人石井太右衛門らが神風丸に来て、西浦賀御用宿伊勢屋忠兵衛方を御用宿と申付ける。浦賀奉行の後で測量、出地相調候此所、北極出地三十五度卅六分也 江戸二十四分差 . 二日から五日迄逗留す 日々村役人来る



7月6日 浦賀出帆

(和式灯台燈明堂)⇒

浦賀湊入り口にあたる燈明崎の先端に、慶安元年(1684)に築造された和式灯台燈明堂を面舵(進行方向右)側見ながら蝦夷へ向かう。左上房鋸山(かずさののこぎりやま)、はるか向こうに大嶋、三宅嶋、新嶋見ゆる。



7月7日 曇 小雨 安房清澄山沖北上中

千葉県南部、安房郡天津小湊町(あわぐん あまつこみなとまち)の山(現鴨川市)。妙見山ともいい、房総三山の一つ。

標高383m。此処日蓮出生也。此国500m以上の山無。

7月8日 快晴 犬棒の鼻、銚子湊

犬棒の鼻、銚子湊見ゆる。

7月9日 常陸、鹿島灘

此辺常陸(ひたち)、鹿島灘と云い、筑葉山見ゆる。はるか向こうに日光山見ゆる

7月10日 快晴 左にクジ山

此の辺より山続きにて奥碕路也。高萩沖北上中。

7月11日 快晴 此辺浪高

此辺浪高さ7・8尺位、長さ27・8間位。是迄順風吹きさる。福島県いわき市久之浜町にある波立寺(はりゅうじ)(波立薬師)



(はったちやくし)は、いわき三大薬師のひとつに数えられ、国道6号をはさんで向かい側に波立海岸(はったちかいがん)がある。このあたりの海岸線は奇岩怪石が連なり、海には歩道橋で結ばれた弁天島があり、鳥居が設置されている。荒波を常に受けており奇勝の地。

7月12日 快晴 伊達大木戸の山

伊達大木戸の山見ゆる。相馬沖北上中。

捨身（しやしん）無常の観念、道路に死なん、  
是天の命なりと、氣力聊（いささか）とり直し、

『路縦横に踏で伊達の大木戸を越す』【芭蕉句】

（俗世を捨て人生の無常を覚悟した身なのだから、  
たとえ道中で死んでも、これは天の定めだと、少し  
元気を取り戻し、足に力を入れて伊達の大木戸を越えた）



7月13日 快晴 奥焔小竹湊へ入津 kotake

奥焔小竹湊へ今晝寅刻（こんぎょうとらのこく、今日の夜明け方午前3時～5時）入津、  
仙台より附役人平塚栄之進井村役人三人来る。此辺皆松嶋八百八嶋の内、17日まで逗留。

18日米1660俵、塩300石、蝦夷地にて魚油を入れる明き樽300積入れる。

順風吹かず21日まで逗留。小竹湊は、宮城県石巻市小竹浜にあり。

7月22日 晴 小竹湊出帆

小竹湊出帆、牡鹿半島西のウサギ嶋沖航行中。午中(午の刻12時ごろ)六十三度十三分

7月23日 小湊湊へ入津 kobuchi

小湊は牡鹿半島やや先端部に位置。小舟2艘迎に参る、仙台方付役人内藤弥右衛門ら3人来る。

7月24日 小湊出帆

後を振り返ると清崎の北側の遠くには、小島を伴った  
岬が見えるが、そこは小湊浜の先端と**兎島**。



7月25～28日 霧雨 北風 昼夜共に海上に罷在候（まかりありそうろう「あり」「おり」  
の謙讓語。あります。おります。）霧雨と逆風の北風のため昼夜共海上に4日おります。

7月29日 霧強し 矢川に入津

霧強し、暮方牡鹿半島おしかはんとうの反対側の矢川に入津、此辺檜（ひのき）多し、白金崎と言山見る、仙台南部の堺也、順風に付出帆す、此辺風烈候節、浪の高サ凡一丈位、長五六十間に見る。「矢川」は現宮城県石巻市谷川浜（やがわはま）（牡鹿半島東部）と思われる。

7月晦日 曇 中南部釜石湊に入津 8月1～3日逗留

入口に三ヶ嶋と云有、尾崎大明神、此辺景色甚吉（はなはだきち）、村役人、名主宇右衛門、年寄利七ら、小舟にて早々御船へ参り、入津の向上を述べ、御用宿与四郎へ案内。



# 4:

尾崎大明神は、釜石湾口南端の岬、尾崎半島にある海陸の守護神である。縁起資料によると、承久2年(1220)6月15日に亡くなった源頼基の廟所(びょうしょ)で、その後自害した七人の家臣も葬り7社の明神として祀られている。

8月4日 雨順風に付釜石出帆

8月4日 宮古浦、鉾ヶ崎湊 wakugasaki-minato へ入津

左 アワタシ湊、白濱湊、大釜崎、ト、カ鼻、御月山、夫れ方宮古浦、鉾ヶ崎湊(くわがさきみなと)へ入津。此辺気色甚吉し、小船二艘にて南部家の役人中嶋万右衛門や船間屋甚左衛門、御用宿日高屋伝次ら8人御船へ参る。中南部閉伊郡(ちゅうなんぶへいぐん)宮古浦鉾ヶ崎湊、年中、此所紺紬出来(こここんつむぎしゅつたい)す。梅干し名物、其外干鮑、鉄山有、第二十五代武烈天皇、此所へ流罪之節、磯辺にて鶏鳴し故、則磯鶏村(そけいむら)と名付けとなり。



8月5～24日 鉾ヶ崎湊日和待ち(わくがさきみなとひよりまち)

順風不吹故、日和待ち、16と23日は出帆すれど急に日和凶(ひよりわる)し帰帆す。……

●(参照:蝦夷地開発記 8月5～24日—8月29日 57頁)

## 此处からが幕府の目指す沖乗り航法

8月25日ようやく3度目、申刻順風二付出帆凡45里(約177<sup>キロ</sup>)も乗出し、最早跡山(船の後方に見えて目標となる山)も見えず、鳥も居らず、ただ渺々(びょうびょう/果てしなく広い)として此辺蝦夷の海上を見る。宮古一厚岸間は凡そ450<sup>キロ</sup>、その4割あたりを航行中と推定。此处宮古から東蝦夷地アッケシへの船の位置を天文航法で求め、陸岸から離れた沖合を直線的に進む、幕府が望む試練の「沖乗り(おきのり)」航法の始まり。

【参考】[http://www.benricho.org/map\\_straightdistance/](http://www.benricho.org/map_straightdistance/) ちょっと便利帳



8月26日 晴、27日 晴 大洋真っ只中航行中

東西南北白浪、此辺浪高さ2丈内外、長さ凡8・90間位、至而荒潮(いたってあらしお)。

(波の高さ 3m×2丈=6m 内外)

8月28日 晴 遙向うに薄山見る

巳刻遙向うに薄山見る、段々近寄。巳刻(みのこく) 9:00~11:00

● 8月29日 晴 東蝦夷地アツケシ入津

暁方（あかつきがた・・夜明けに近いころ）蝦夷連山速に見る。夕方大黒嶋へ入る。

無程東蝦夷地アツケシと云う所へ申刻入津す。此所測天度悪消にて43度22分也。

直伝馬船に乗り、アツケシの御会所へ参る。江戸より陸地で参り詰めている御普請役戸田又太夫、御小人目付（徒目付（かちめつけ）に従い各種の調査や警備などに当たる）松田仁三郎兩人と対面した。（参照 59頁）

申刻（さるのこく）15:00～17:00（註：角度の度数から度に変換 43.366666。実際は43度02分誤差（+）20分。10進法に換算は 43.0333333）にて[任意の地点の緯度・経度を取得ソフト](#)を使い、緯度 43.0333333 の近似値（43.033333177553594、144.8340618610382）を取得と云うことでこの座標に入津したと仮定する。



緯度： 43.033333177553594  
経度： 144.8340618610382

仙台藩東蝦夷地経営図 アツケシ

函館市中央図書館デジタル資料館折図 119\*82cm



天度を測って直ぐ伝馬舟に乗り、アツケシの御会所へ罷越すとあり、バラサン岬の沖合に碇泊し、同岬を迂回して厚岸湾内に入り、御会所へ行ったものと考えられる。

沖の井はいつこと問ハ陸奥の宮古嶋辺に有明の月

松山村 藤原村 磯鶏村と言所有

武烈天皇流罪之節、此所へ着す時、磯辺にて鶏鳴し故、則磯鶏村と名付となり

大同二年、武烈天皇、黒森山を開、菩提所に被致候由、其頃此辺民家漸四五軒も有之由、今ハ千軒余有之、扱順風不吹故、八月五日ハ廿四日迄日和待致し候、尤十六日と廿三日と両度致出帆候へ共、急ニ日和凶し、両度共帰帆す、漸三度目になり、廿五日申刻順風ニ付帆出帆、帆六合位持、凡四十五里も乗出候得者、最早跡山も不見、鳥も不居、唯渺々として此辺蝦夷の海上と見る、廿六日晴、廿七日晴、東西南北白浪斗、此辺浪高サ凡二丈内外、長サ凡八九十間位、至而荒潮にて候、廿八日晴、巳刻遙向に薄山見る、段々近寄、翌廿九日晴、暁方蝦夷山速に見る、夕方大黒嶋江入、無程東蝦夷地アツケシと言所へ申刻入津す、此所にて測天度○悪消にて北極出地四十三度二十二分也、直伝馬舟に乗、アツケシの御会所へ罷越ス、從江戸陸地罷越候詰合兩人有之、御普請役戸田又太夫、御小人目附松田仁三郎、右兩人江逢対す、九月朔日曇、二日晴、三日曇、四日晴、逗留ス、南部大膳大夫殿江勤番詰被 仰付、此所へ南部家ハ番頭、物頭、目附其外諸役人、又足輕式百人召連、五ヶ所程番家を建、相守候、当年初而

大神宮建立ス、則参詣す、又始て田地を開、新畑に大豆、小豆、粟、ヒエ、大根、唐からし、たはこ、紅花、麻、茄子、大角豆、胡麻、其外都而之品日本人罷越、今年始而作付候也

蝦夷詞

シナイフ	トラフ	レイフ	イナノフ	アシキチイフ	エワンベ	アルワンベ	トベシヤンベ	シチシヤンベ	ワンベ
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
十六文と言事	エワンベ	イカシマワンベ							
廿四文と言事	イ子ノフ	イカシマトヲブ							
昨日	今日	明日	明後日	日本	日本人				
僧	蝦人〔男	アイノ、女	メノコ、	其所にて庄屋	託言へき頭	達候者を、			

18 頁上段

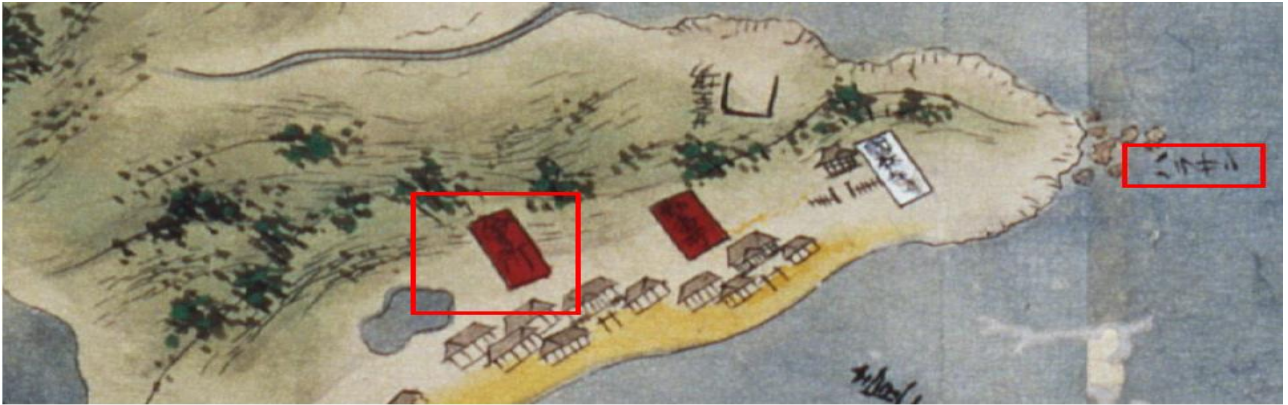
堀田仁助と伊能忠敬の緯度測定値（北緯）一部の比較表

地名	仁助	勘解由	実際
アツケシ	4 3 度 2 2 分	4 3 度 0 2 分	4 3 度 0 2 分
コンブムイ	4 3 度 1 2 分	4 2 度 5 8 分	4 2 度 5 7 分
ミツイシ	4 2 度 3 1 分	4 2 度 1 3 分	4 2 度 1 5 分
箱館	4 2 度 0 8 分	4 1 度 4 7 分	4 1 度 4 6 分
松前	4 2 度 0 0 分	4 1 度 2 8 分半	4 1 度 2 6 分

(「日本北辺の探検と地図の歴史」秋月俊幸 掲載データを抜粋加工)

筆者秋月俊幸は典拠を明らかにしておらず、蝦夷地行の際の仁助の手控えも見つからず、仁助の測定値は、検索の結果、典拠の特定に至らず。





寛政11年(1799)8月29日、仁助一行の神風丸がアッケシに入津した当時には、厚岸湾に突出するバラサン岬には、寛政3年(1791)最上徳内(もがみとくない)建立の神明宮があった。

絵図にある国泰寺は、箱館奉行の願い出により幕府が蝦夷三官寺えぞさんかんじのひとつとして、文化元年(1804)に建立したものである。

蝦夷三官寺えぞさんかんじとは、様似郡様似町さまにの等澗院とうまんのいん、伊達市有珠の善光寺、アッケシの国泰寺。



(バラサン岬)

9月朔日曇、2日晴、3日曇、4日晴 逗留ス

南部大善大夫江勤番詰被仰付おおせつけられ、此所へ南部家方番頭(ばんがしら)、物頭(ものがしら)、目付其外諸役人、又足軽式百人召連、5ヶ所程番屋を建て警護、当年初めて大神宮建立す、則(そく)参詣す、又始めて田地を開き、新畑に大豆、小豆、粟、ヒエ、大根、唐からし、たはこ、紅花、麻、茄子、胡麻、今年始めて作付也。

## 江戸からアッケシ間の航路日数

寛政11年(1799)6月27日江戸を「神風丸」にて出帆、東蝦夷地アッケシ8月29日入津。  
62日を要した航路開拓であった。(6月-3日, 7月-30, 8月-29 計62日 出立日含む)

9月5日晴 アッケシ出立、

蝦夷詞えぞことばを使用しており、殊に地名が現在の地図に見えず行程不詳。  
アッケシより方松前迄道のり壱百五里程あり、但し三十六丁を一里とす。  
夫方それより陸地松前通、津軽、南部、仙台江掛り、江戸江着ス。

寛政11年(1799)11月15日 江戸着。

結局136日を要した測量の道中なり。



## 堀田仁助 東蝦夷地測量 行程日数

ツチノヒツジ 寛政11年(己未)		全行程期間	日数	(「蝦夷地開発記」鈴木周助より)								
小の月6月	29日	27-29	3日	海路 江戸出立～アッケシ着(6/27～8/29) 62日 アッケシ滞在(9/1～9/4) 4日 陸路 アッケシ発～江戸帰着(9/5～11/15) 70日 (但し松前～青森 三厩(みんなまや)間は官船利用)								
大の月7月	30日	1-30	30日									
小の月8月	29日	1-29	29日									
大の月9月	30日	1-30	30日									
小の月10月	29日	1-29	29日									
小の月11月	29日	1-15	15日									
全行程日数			136日									
寛政十一年 (己未)	一月※	二月	三月	四月	五月※	六月※	七月	八月※	九月	十月※	十一月※	十二月

※印 小の月(29日) 大の月(30日) [寛政 - Wikipedia](#)

## 《あとがき》

2006年から17年の長きに渡り追い求めてきた堀田仁助の事蹟が認められなかった原因探は、その間に収集した史料とその典拠を示しつつ、執筆中にも新たな史料を求めて継続して検索を行ってきた。此度、仁助の過去の事蹟が完了後、不幸にもその事蹟を著した書物の発見が遅くその間に羽太正養<sup>はぶとまさやす</sup>「休明光記1」(判読しやすい翻刻本P53)の虚偽の情報が底本として引用され、明らかに事実ではない事蹟が修正もされず一人歩きし、事蹟の事実(蝦夷地開発記 鈴木周助)が昭和7-8年発見されたにも関わらず世間に知名度が浸透できなかったことが、事蹟が認められない致命的な要因と考えられる。

蝦夷地取締御用掛筆頭の松平信濃守の仁助に対する手厳しい理不尽な評価、また羽太正養の悪意のある錯誤の「休明光記」、しかも幕府の一大事業の一翼を担った当の仁助本人の執筆した本がコピー不可(「幻空雑記 堀田仁助」参照 本P53-54)、もしも門人の著した本が霧散して存在しなかった場合、仁助の真実の事蹟は世間に知られなかったのである。幕府との交渉についても忠敬は測量日記に記録を残しているが、松平の手厳しい理不尽な評価が影響したのか、仁助は何も残していない。その意味するところは何なのか。さらに、「堀田仁助と伊能忠敬の緯度測定値(北緯)一部の比較表」秋月俊幸(本P60)の仁助の測定値は何等かに記録されており引用されたものと考えられるが、この著者は典拠を明らかにしておらず、典拠を求めた検索も力及ばず特定することができなかった。

悲しいかな、仁助の師は病魔におかされ、蝦夷地行の二週間前に病死している。幕府との交渉で津和野藩、渋川家の援助・助言等有や無や。伊能忠敬「測量日記第一巻」(本P11～15)より、仁助と忠敬の援助・助言に関し、何かにつけて雲泥の差がある一方、伊能忠敬は79冊も書き残している。その保存にあたり末裔の努力があったのは間違いない。

仁助は蝦夷地行55歳～天文方引退83歳まで28年間の天文人生であった。廿日市が同郷という縁で17年間調査してきたが、史料が見つからないのがネックになり、今後も新史料が期待出来そうもない閉塞感に苛まれ、今回、堀田仁助の集大成「特集 堀田仁助再考」にまとめ一応完結とする。

[【目次へ戻る】](#)

[《トップページへ》](#)

[お主サイトトップページ](#)